

# ナイチンゲール

かんごふの母といわれる愛の天使

山主敏子



児童伝記シリーズ

8

# ナイチンゲール

かんごふの母といわれる愛の天使

山主敏子



8

児童伝記シリーズ



N. D. C. 289 偕成社 202p. 22cm. 1974

児童伝記シリーズ 8

## ナイチンゲール

1974年 重版 10

山主敏子—————著者

今村 広—————発行者

小泉松三郎—————印刷者

新陽印刷—————印刷所

東京都文京区白山2の13の11

---

株式会社 偕成社—————発行所

東京都新宿区市ガ谷砂土原町3の5 〒162

電話 (東京) 260—3221 (代) 振替 東京1352番

---

© 1958年

—————落丁本・乱丁本はおとりかえいたします—————

8323—503080—0904

printed in Japan.

## この本について

みなさんは、『愛の天使』とたたえられ、せかいじゅうの人びとにとぅとばれている、ナイチンゲールのおはなしを、きいたことがあるでしょう。

ナイチンゲールは、子どものときから、とても、やさしい人でした。あわれなどうぶつや、まずしい人に、しんせつをつくすやさしい心は、おとなになるにつれて、ますます、たかめられるばかりでした。

しあわせな家にうまれたナイチンゲールが、なぜ、かんごふをしてまで、世のため、人のために、はたらくようになったのでしょうか。

この本には、そのナイチンゲールの、心あたたまる一生が、わかりやすくかいてあります。

山 主 敏 子



もくじ

しあわせな家<sup>いえ</sup>

.....六

あねといもうと

.....八

花<sup>はな</sup>のみやこで

.....六

おにぎょうのかんぴょう

.....四

年<sup>とし</sup>より馬<sup>うま</sup>ベギー

.....三

マーサーのおばあさん

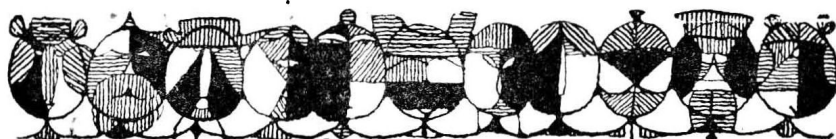
.....五

かんがえふかい少女<sup>しょうじょ</sup>

.....五

けがをした犬<sup>いぬ</sup>

.....五





世<sup>よ</sup>

のなかへでる

ポーツマス港<sup>みなと</sup>で……………  
五

にんげんのいのち……………  
六

おじさんの家<sup>いへ</sup>へ……………  
七

おかねもちとびんぼう人<sup>ひと</sup>……………  
八

五

あかちゃん大<sup>だい</sup>すき……………  
五

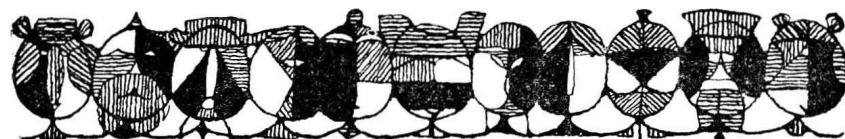
神<sup>かみ</sup>さまのこえ……………  
一〇

めこがれの国<sup>くに</sup>ぐにへ……………  
一三

ふしあわせ人<sup>ひと</sup>たちの友……………  
一三

かんごふになろう……………  
一三

ねがいかなって……………  
一五





ランプをもつ天使……………

一七

せんそうのまんなかへ……………

一七

くすりもたりない……………

一五

びょうにんをあたたかく……………

一五

クリミヤねつ……………

一七

なつかしいふるさと……………

一八

赤十字のおこり……………

一八

ナイチンゲールについて(解説)……………

一九

へもくじおわり







さ口も  
し  
え絵え

石じ

田だ

武たけ

雄お

# ナイチンゲール

かんごふの母といわれる愛の天使



山主敏子 著



## しあわせな家

あねといもうと

みどりの野道<sup>のみち</sup>を、馬車<sup>ばしや</sup>は、かつかつかつと、きもちのいい、ひずめのおとをひびかせて、かけていきました。

馬<sup>うま</sup>のたづなをにぎっているのは、ももいろのぼうしをかぶった、かわいらしい女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>です。そばには、その子<sup>こ</sup>のおねえさんらしい女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>と、やさしそうな、わかい女<sup>おんな</sup>の人<sup>ひと</sup>がのっています。

「あら、フロー、もっとはやく、チェリーをはしらせなきやだめよ。おうちへかえるのが、おそくなっちゃうじゃないの。たづなを、あたしにおかしなさいよ。」

おねえさんらしい女の子は、ちいさい子の手から、たづなをとると、馬のせなかを、  
びしやりびしやりと、たたきました。

「チェリーは、くたびれているのよ。おもい馬車をひいて、さかをのぼるときは、かけ  
させちゃ、かわいそうだわ。ねえ、そうでしょ、クリステイ先生。」

たすけをもとめるように、フローとよばれた女の子は、そばの、やさしそうな女の子の人  
を、みあげていました。

「そうね。むりにかけさせたら、かわいそうよ。でもチェリーは、まだ、そんなにくた  
びれていないから、だいじょうぶでしょう。ほら、ごらんなさい。おうちの門がちかづ  
いたから、あんなにみみをびんとたてて、よろこんで、かけていくじゃありませんか。」

クリステイ先生は、フローにかおをよせて、にっこりなさいました。

「クリステイ先生。フローは、チェリーのことが、しんぱいなんじゃないんです。おう  
ちへかえって、おおぜいのおきやくさまに、ごあいさつするのが、いやなんです。だか  
ら、フローは、なるべくゆっくりして、おきやくさまが、みんな、おかえりになったあ

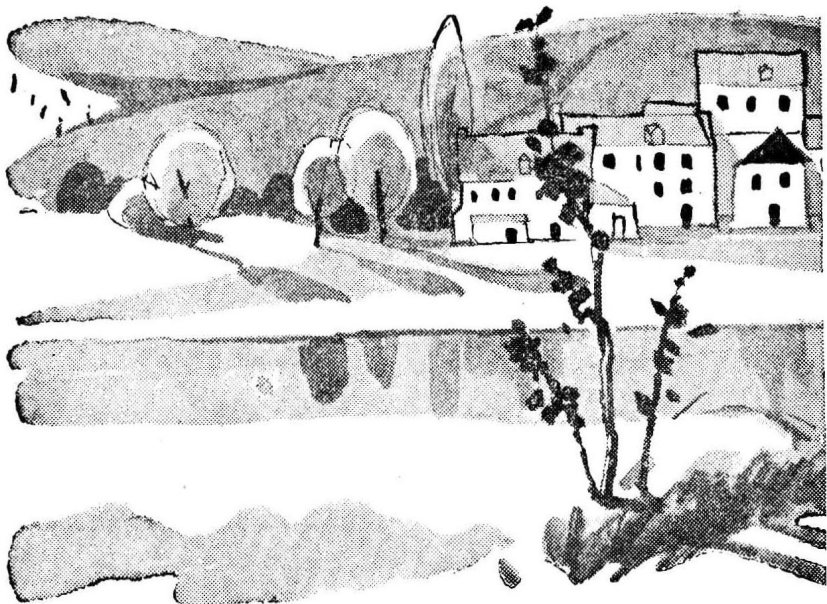
とで、おうちへつくと  
いいと、おもっているのよ。ぽか  
なフロー<sup>な</sup>ったら、もう七つにもなる  
のに、あかちゃんみたいね。」



年上としうえの女おんなの子こが、いいました。フローは、あかいかおをして、下したをむきました。

おねえさんのパーセノーブのいたことは、ほんとうでした。フローは、しらない人ひとにあうのが、とてもこわかったのです。けれど、いもうとをわらう、おねえさんのパーセノーブだって、たったひとつちがいの、八つだったのです。

チェリーは、げんきよく馬車ばしゃをひいて、かけだしました。門もんのなかの、ながいながい小道こみちのむこうには、た



くさんの大きな木と、しばふにかこまれた、りっぱなやしきが、みえてきました。それが、フローたちきようだい、ナイチンゲール家の人たちのすむやしきで、エンブリー・パークとよばれていました。

白いぼうしと、エプロンをつけた女中さんが、なんにんも、げんかんに、でむかえていました。

「おかえりなさいまし。」

「ただいまあ。」

フローが馬車をおりると、白とくろのぶちのダンディという犬が、ちぎれるほどしつぽをふりながら、とびついてきました。

「だめだめ、ダンディ、そんなにくわえたら、きものがやぶれちゃうわ。」

「おじようさまがた、すぐおきやくまへ、おいでになるようにって、おくさまが、おっしゃっておいででございますよ。」

女中さんがいいました。それをきくと、パーセノーブは、いそいでげんかんの石だん

をあげて、家のなかへ、かけこみました。でも、フローは、ダンディをなでてやりししながら、いつまでも、ぐずぐずしていました。

クリステイ先生が、やさしく、フローをたしなめました。

「フローレンス、おかあさまのいいつけを、よく、まもらなくてはだめよ。あたしは、チェリーをうまやへいれてきますから、さあ、はやく二かいへいって、ばあやにおようぶくを、きかえさせてもらうんですよ。」

ところが、フローは、先生のはなしが、みみにはいらないうすで、また、ダンディの上に、かがみこみました。

「あら、先生、みてごらんさい。ダンディに、のみがたかっているわ。ささないうちに、おくすりをかけてやったほうが、いいんじゃないかしら。」

「ダンディのみよりも、おかあさまのいいつけをまもるほうが、たいせつよ。」

クリステイ先生が、とうとうがまんしきれず、大きなこえをだしたので、フローは、しかたなく、おうちへはいました。

二かいの子どもべやでは、ばあやのゲールと、女中のハンナが、フロをまっていた。

おねえさんのパーセノープは、かがみのまえにすわって、つやのいいかみの毛を、もう、すっかりとかしつけ、大きなリボンを、むすんでもらっていました。ところが、フロのほうは、おねえさんのように、かんたんには、きがえができません。

「フロさま、もっと、じっとしていらっしやらないけりや、こまりますよ。ごらんさい、おねえさまは、あんなに、きれいにおなりなさいましたよ。あなたは、おきやくさまにおあいしたとき、まあ、きれいなおじょうさんって、ほめていただきたくないんですか。」

ばあやが、あきれたように、しかりました。

「あたし、ちっともおきやくさまに、ほめてもらいたくないわ。だって、いそがしいんですもの。おにんぎょうのほうたいも、まいてやらなく

